

日本民家園だより

特集

旧工藤家住宅

vol.69

企画展示「南部曲屋 -旧工藤家の暮らし-」

2009年1月4日(日)~5月31日(日)

『日本民家園収蔵品目録11 旧工藤家住宅』刊行

工藤家のくらし

- 岩手県紫波郡紫波町船久保宇小屋敷 -

■はじめに

国指定重要文化財・旧工藤家住宅は、主屋の前隅に厩^{うまや}をL字型に突出させた、いわゆる「南部曲屋^{なんぶまがりや}」です。旧所在地の岩手県紫波町は、同じ紫波郡内の矢巾町とともに、かつてはこうした民家が最も多く見られる地域でした。

曲屋は江戸時代中ごろに、南部駒の飼育が盛んになるとともに工夫された形式です。土間をはさんで人の住まいと厩とが一体となり、馬も家族の一員として大切に育てられていました。

ここでは明治41年(1908)生まれの工藤ソノさんと昭和23年(1948)生まれで五男の宗吾^{もうちょう}さんからうかがった話を中心に、工藤家の暮らしぶりについていくつかご紹介することにしましょう。

■冬の寒さ

東北といっても、工藤家周辺は雪の多い地域ではありません。屋根の雪を下ろすようなこともなく、自然に落ちてくるのを待ちました。ただし、冷え込みの方は非常に厳しいものがありました。軒からは氷柱^{つらら}が垂れ下がり、地面に達するほどになったそうです。

このような気候ではありましたが、工藤家で畳があったのは1間だけでした。この畳も敷くのは客のあるときだけで、普段は台の上に積んでありました。そのほかの部屋はすべて板の間でしたが、冬場も何かを敷くことはありませんでした。

寝るときはこの板の間にクズフトンとフトンを敷きます。クズフトンの中身はワラの柔らかいところ、フトンの方は木綿のワタです。工藤家は天井を張っていませんでしたので、寝ていると屋根の煙出しから雪が吹き込み、顔に降りかかることもあったそうです。

主な暖房は、この地方で「ヒボド」と呼ばれる囲炉裏でした。夜、寝る前にヒボドの火を落とすことを「火留め」といいます。まず炉のまわりを掃除し、木尻(燃え残り木)に水をかけて火を消します。そして炉の炭火の中に2、3本の木を入れ、まわりを灰で固めます。この木はナラなどを1尺ほどに切ったもので、「留木^{とめぎ}」といいますが。朝はこの火を熾^{おこ}すことから始まりました。焚き付けを乗せ、付け木で点火し、釜を掛けて湯を沸かすのです。これを「朝火」といいます。宗吾さんが子どものころ、朝起きるとい

つも母親のソノさんが火を焚いており、パチパチパチパチと音がしていたそうです。

なお、留木には上等な木を使うため、朝まで残ります。工藤家ではこれを消壺^{けしつぼ}に入れて消火したのち、木炭として使っていました。また、ヒボドの灰も捨てることはありませんでした。肥料になったほか、畑の雪や凍った坂道の上に撒くのに使うからです。灰を撒くと日の光で溶けやすくなるのに加え、滑るところではざらざらして歩きやすくなったそうです。そのためどこの家でも灰は捨てず、家の外の便所などに保管していました。

■葉煙草

工藤家は農家です。現在はリンゴなど果樹栽培が中心ですが、かつて養蚕とともに家計の柱となっていたのが葉煙草の栽培でした。貴重な現金収入源だったためこの地域では盛んに行われ、今も栽培をつけている家があります。

葉煙草の栽培は、春に植え冬に吊るすという1年がかりの仕事でした。作業は腐葉土を作ることから始まります。腐葉土には山の落ち葉を使いますので、家族でワイワイ騒ぎながら集めたそうです。

この腐葉土をビニールハウスの中に入れたら、まず種撒きです。そして、少し大きくなると畑に移します。このとき1本1本すべて数え、どこの畑に何本植えたか専売公社に洩れなく届けなければなりません。煙草は専売制のため管理が非常に厳しく、届けないと「密造」ということになっていたからです。

工藤家で栽培していたのはバレー種という品種です。高さは2mにもなり、作業するときは上を向かなければなりません。日差しが直接顔に当たるため目を悪くする人もいましたが、昔のことなのでサングラスもかけずに作業したそうです。

1株の一番上の葉を「テンパ」といいます。この葉は品質が悪くて辛く、「エコー」や「新生」など安い煙草に使われました。真ん中の立派な葉は「ホンパ」といいます。こちらは「ハイライト」や「ピース」とい



部屋の中に煙草の葉を吊す(昭和42年・大岡實博士撮影)

た良い煙草に使われました。

9月、秋の養蚕が終わると煙草の葉の乾燥がはじまります。煙草の成分は蚕の成育に悪く、そばで乾燥させると青水を吹いてマユを作れなくなってしまうそうです。そのため、蚕がすっかり済んでからでないで煙草を吊るすことはできませんでした。

葉を吊るすときは縄を使いました。縄目に葉をはさみ込み、これを部屋に渡すのです。縄を渡すときはみな梁に上って作業しました。工藤家には天井板がありませんでしたが、天井を張るとこうした作業がしづらいこともその理由の1つだったようです。煙草は家中に吊りました。チャノマにもザシキにもすべて吊りましたので、家の中を歩くときはかんで歩かなければなりませんでした。どの部屋にも真ん中に炬が設けてあり、雨が降ったりすると乾燥させるために火も焚きました。

乾燥を終えた葉は専売公社に出荷するため重ねていきます。1枚1枚しわを伸ばして重ねていくのですが、葉からヤニがたくさん出るため素手だと手が黄色く染まり、何カ月も取れなかったそうです。それでも子どもも年寄りも家族全員が集まり、いろいろなことをしゃべりながら作業しました。それが冬の夜の仕事だったのです。

■馬と暮らす

耕運機が入るまで、工藤家では畑や田んぼは馬を使って耕していました。馬にマンガン（馬鋤）を引っ張らせるのですが、後ろから思いきり押してやらないと馬も途中で止まってしまう。そのため、押す方も大変な作業でした。このほか、山から木を下ろしたりする作業にも馬は欠かせませんでした。

マヤ（厩）には2頭の馬が飼われていました。博勞はくろうから買い求め、栗毛なら「クロ」、赤毛なら「アカ」などと呼んで家族同様に大事にしました。

エサは朝・昼・夜の3回です。エサにしたのは稲ワラ・燕麦えんばく・葛の葉などで、ワラには割合を決めてフスマ（小麦を粉にしたときの残りかす）を混ぜたり、貯めておいた米の研ぎ汁を混ぜたりしました。家族がご馳走を食べるトシトリ（大晦日）には、馬にも小麦をやったりしたそうです。またエサのほか、水も飲ませました。しかし、冬場は冷たいまま飲ませることはせず、鉄の釜を火にかけて温めてやりました。

マヤの上には中二階がありました。ここにはワラや葛の葉など、冬のエサが積み上げてありました。積み上げるときは、子どもたちの中で元気の良いのが下から投げ上げ、もう1人が上で受け取って、奥

の方から詰めていきました。

マヤの土間は掘り下げてあり、ワラを敷いて馬に踏ませていました。こうすると非常に良い肥料になったため、どの家でもやっていました。また、この土間は掘り下げてあるだけでなく、傾斜がつけられていました。馬のシッコ（尿）が流れて、マヤの外側に溜まるようになっていたのです。馬のシッコも大事に溜めておき、肥料として畑にかけていました。

馬が子どもを産むこともありました。主屋移築時の当主・磯吉いそきちさんはよく、生まれてくる子馬を母馬のおなかから引っ張り出してやりました。自分の手だけで間に合わないと「ほら軍手をしろ」といって、家の女性たちにも手伝わせていたそうです。

普通のお産は家族で世話をしましたが、難産はくらくのとき、あるいは病気にかかったときは伯樂はくらくを呼びました。伯樂とは馬の医者いそぎのことで、近くの集落に専門にやっている人がいました。伯樂は呼ばれて来ると馬の様子を診て薬を飲ませたりしましたが、それでも昔はずいぶん馬が死んだそうです。

「大事にしたども、死ぬさも死んだったな。」（ソノさん）

工藤家の山の高いところに「ウマノハカドコ」がありました。ここは馬の共同墓地で、村で馬が死ぬと、みなここに運んで葬りました。埋めたところにはワラで作った馬を立て、煮豆を供えてやったそうです。

■おわりに

工藤ソノさんは100歳になります。お話をうかがったおり、これまで生きてきて一番楽しかったことは何ですかとたずねたところ、こんなふうにご返事くださいました。

「なんても（どんなふうであれ）楽しいのす。ほんだがら、こうして生きている。」

（渋谷卓男）



工藤ソノさんと宗吾さん（平成20年）

旧工藤家住宅関係資料



シアゲ

南部塗。祝儀の際、清酒を入れたもの。



シアゲ

祝儀の際、ドブロクを入れたもの。



ツマゴ

冬場の履物。



ウマノクチカゴ

稲を馬で運ぶ際、馬の口につけて食べられないようにする。



タグリカギ

ウマヤの肥を掻き集める際に使う。



カイバオケ

馬のエサを入れる。



ガワ

麻糸を巻く際用いる。



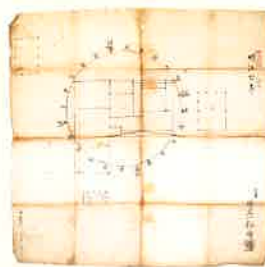
ヘソ

巻いた麻糸。



バンド

山仕事用の背中当て。



家相図

明治7年。

日本民家園だより vol.69 発行：平成21年1月4日

川崎市立日本民家園

URL <http://www.city.kawasaki.jp/88/88minka/home/minka.htm>

〒214-0032 川崎市多摩区枳形7-1-1 TEL 044(922)2181 FAX 044(934)8652 交通：小田急線「向ヶ丘遊園」駅南口下車徒歩13分

開園時間 [11~2月]午前9時30分~午後4時30分 [3~10月]午前9時30分~午後5時 入園は閉園30分前まで

休園日 毎週月曜(祝日の場合は開園)、祝日の翌日(土・日曜の場合は開園)、12月28日~1月3日

入園料 一般500円、高校・大学生300円、65歳以上300円(川崎市在住の方無料)、中学生以下無料